う。三吉は大急ぎで家へ歸つて、この間金持から貰つた林檎の種を庭へ蒔きました。それから例の壺の中から魚の腸を出してそれを肥料にやつて、さて野鼠に教つた通り『黄金の林檎よ生つとくれ』と唱ひながら、種を蒔いた上を三度踏んで置きました。翌朝何うしたかと思つて庭へ出て見るとまあ驚くぢあありませんか。一本の見事な林檎の樹が青々した葉を茂げらせ、その葉の中に、ゴム鞠ほどの大きさの黄金の林檎が、朝日を浴びてキラキラと輝いて居ります。三吉は大喜びで其黄金の林檎を取つて大急ぎで街へ行きました。さうしてきつとお姫樣の病を治すと申しますと、王樣の家來は三吉が汚い子供なのを見てその詞を信じません。三吉は何卒御姫樣に逢はしてと願ふと家來は『よし。そんならお姫樣にお取次するが、もし病氣を治す事が出來なかつたら、貴樣の命を取るぞ』と云ひます。

三吉はそれでも構ひませんと云ふと、お姫樣の病室へ案内されました。見るとお姫樣は青い顔をして糸のやうに痩せて居らつしやいます。三吉は直ぐその林檎をお食べ下さいとさし上げました。お姫樣は甘さうに黄金の林檎を召上がると、これは不思議、忽ち顔色が赤味を帶びて來て、今まで寢て居たのに、元氣よく床の上へ起き上がつてニコ〳〵とお笑ひになりました。お姫樣の御病氣はすつかり治りました。

三吉は約束通り、お姫樣のお聟樣になり、その後國王になりましたとさ。

魔法杖

昔ある所に一人の木樵が居りました。妻が死んで二人の息子と暮らして居りましたが大變貧乏で

した。ですから木樵はいつも金が欲しいと思つて居りましたが中々金の儲かる仕事もありません。或る日いつもの通り木樵は斧をもつて山へ木を切りに行きました。高い木の上に上つて枝を折つて居ると向ふから奇妙な男がやつて來ました。其男は眞赤なダブ〳〵の着物を着て、同じく眞赤な尖帽を冠つて手には一本の杖をついて居ます。杖は黑い木で出來て居て握手の所に蛇の首が刻つてありました。男は目が氣味惡く光つて、鼻が鉤のやうに曲つて居ました。何者だらうと思つて見て居ると、それと反對の方から一人の旅人がまゐりました。二人は丁度木樵の居る木の下ですれ違ひました。その時奇妙な男はいきなり杖を上げて『驢馬になれ』と云ふと共に旅人の肩を杖でパッと打ちました。するとこれは不思議!! その旅人が立ちすくむと思ふとバタリと前へのめつて忽ち驢馬になつてしまひました。奇妙な男はそのまゝ驢馬に乘つて何處かへ行つてしまひました。木樵は大變驚いて飛ぶやうに我家へ歸つて右の事を息子に話しました。息子は『お父さん。そりあきつと魔法つかひだよ。その杖は魔法杖に違ひ無い。そんな調法な杖があつたらどんなにうまい事が出來るだらう。欲しい物だねェ』と云ひました。

翌日、木樵は又昨日の所へ行つて木を切つて居ると又向ふから魔法つかひが赤い衣物を着てやつて來ました。見つかつたら大變だと早速木の上にのぼつて見て居るとそこへ一人の百姓がやつて來ました。魔法つかひと百姓とがすれ違つた時、魔法つかひはいきなり『鷄になれ』と云つて杖で百姓を打ちました。と百姓は忽ち一羽の鷄に變つてしまひました。

魔法つかひはすぐとその鷄の首をしめて殺してしまひ羽根をむしりました。それから落葉や枯枝を集めて火をつけて、その鷄をあぶて甘さうに、ムシャ〳〵と食べ終るとそのまゝ何處かへ行つてしまひました。

木樵はビックリしました。昨日の旅人は只驢馬になつたゞけだからよいが、今日の百姓は鷄にされた上殺されてしまつた。はてさて恐ろしい事だとふるへながら家へ歸つてこの事を話しました。すると長男は慾張りな男でしたからその杖が欲しくつて堪りません。次男も同じやうにづるい男でしたからその杖を取り度いものだと思ひまして、兄弟二人して親父の木樵にその杖を奪ひ取れとすすめました。木樵は驚いて『馬鹿な事を云つてはいけない。相手は魔法つかひだもの。うつかりした事をすれば殺されてしまふ』と云ひました。

すると息子達は『何、お父さん。いゝ方法があります』と云つて何やらヒソ〳〵とさゝやきますと木樵は『ウン。それはよからう。一つためしにやつて見やう』と受け合ひました。

翌日、木樵は瓶の中へお酒を一杯入れて眠藥をまぜて、それをもつて例の場所へ行きました。さうして木の根元へその瓶を置いて自分は木の上へ上つて樣子を見て居りますと、そこへ例の魔法つかひが魔法の杖をもつてやつて來ました。木のそばへ來ると急にプン〳〵と鼻をひこつかせて居たが、瓶を見ると急にかけよつて中をのぞきましたそれからニコ〳〵し乍ら首をつつこんでガブ〳〵とお酒を飲みはじめました。すつかり飲み切ると眞赤な顏をしてフラ〳〵と歩き出したが、急にそこへバタリとひつくり返つてグウ〳〵寢てしまひました。

木樵は『しめたぞ』とすぐに木から下りて、そつとそばへ寄り寢息をうかゞひ、そろ〳〵魔法つかひの手から杖を取りにかゝりました。首尾よく杖を取り上げたそのとたん、急に魔法つかひは目をあけました。と急にとび上つて『おのれ、盜人奴』と云つてつかみかゝりました。木樵はビックリしたがもうおそい、かうなるからは進むより仕方が無いと、いきなり魔法杖をふり上げて魔法つかひにとびかゝり『岩になれ』と叫ぶと共に、バ

ッと魔法つかひの肩を杖の先でなぐりつけましたするとこれは不思議!! たちまち魔法つかひの體はバッタリ倒れると共に眞黑な岩になつてしまひました。

（二）

首尾よく魔法杖を手に入れた木樵は大喜びで家へ歸りました。息子二人も喜んで『これからはこの魔法杖をつかつて一つ金儲けをしやう』と親子でよくない事を企てました。

それから木樵は毎日山へ出かけて通りかゝる旅人や百姓を魔杖で打つて牛や豚や羊に變へましたさうしてそれを市場へ賣つて段々お金を儲けました。しかし誰もこの木樵がそんな不思議な杖を持つて居て、そんな惡事をするとは思はなかつたので、木樵は益々魔杖をふるつて人を獸にして金を儲け、毎日酒を飲んでは馳走を食べて親子して贅澤をして居りました。所がとう〳〵惡事のむくいが來て大變な事が出來ました。或る日親父の木樵が酒を飲んで居る所へ、同じやうに醉つぱらつた長男がやつて來まして『お父さん。少しお金を下さい』と云ひました。親父はあんまり度々息子が金をくれと云ふので大變立腹して『お前はまあ何度金をくれと云ふのだらう。もうお前にはやれないよ』と云ひますと、長男は『でも魔法杖の御蔭であんなにお金を儲けたくせに少しくれてもいゝだらう』と云ひ張つて、はては醉つたまぎれに親子二人は口汚く罵り合ひました。とう〳〵親父は醉つてる上に腹立ちまぎれに『エヽ、貴樣のやうな親不孝な奴は、いつそ豚になつてしまへ』とどなつていきなり杖で息子の肩をバッとなぐりました所がその杖が例の魔法杖だつたから堪りません。バッタリと前へのめると共に、長男はたちまち一頭の豚になつてしまひました。親父の驚きは何んなでしたらう。醉ひも醒めて眞つ靑になつてしまひました。醉つたまぎれに大切な息子一人を豚にしてしまつたのですもの、何うしたら元の人間に

かへす事が出來るかと試に『人間になれ』と云ひながら魔杖で豚を打つて見たが人間にはなりません。仕方が無いからその豚を豚小屋に入れて置きました。

或る日大變雪が降りました。その暮方一人の年老いた順禮が木樵の家へやつて來て『宿を貸して下さい』と頼みました。木樵はこの順禮を一つ獸にして賣つてやらうと思ひわざと丁寧に『お安い御用です、何卒御泊り下さい』と云つて親切に待遇しました。やがて御飯も食べ終へて順禮は机に向つて何か書き出しました。隙をねらつて居た木樵はそつと順禮の後へまはり、彼の魔法杖をふり上げて、『羊になれ』と叫ぶと共にバッと順禮の肩を打ちました。所が何うした事か羊になりません。肩をたゝかれた老人はびつくりしてふり向いて、『何をする』ときゝます。この順禮は聾だつたので『羊になれ』と云つたのがきこえなかつたのです。木樵は順禮に『蠅が肩へとまつたから打つたのだ』と手眞似で話してごまかしました。それにしても何故順禮が魔杖に打たれても羊にならなかつたのでせう。それは順禮の胸に金の十字架がかけてあつたからです。神の御しるしの十字架の爲に魔法も役にたゝなかつたのです。さう氣がついて木樵は何うかしてあの十字架をはづさしてしまはうと思つたが中々出來ません。それでは此順禮を寢かしてしまつてから、そつと奪ひ取らうと決心して順禮を寢床へ案内しました。順禮の床の隣には木樵の次男が寢ました。夜中に次男は目を覺ますと寒つて堪りません。そこで隣に寢て居る順禮が頭巾を冠つて居るのを思ひ出して、そつと手さぐりで順禮の頭巾を取つて自分の頭へ冠りました。それから順禮が毛皮をかけて居たのを思ひ出して、それも取つて自分でかけました。さうして又グー〳〵寢てしまひました。そこへ木樵が忍びこみました。寢室は眞つ暗ですが燈をつけて順禮が目をさましてはならぬと暗がりを手さぐりで魔

杖を握つたまゝそろ〳〵と寢床へ近よりました。けれど何處の寢臺へ順禮が寢て居るかわから無いのでそつとさぐつて見ると次男の頭の頭巾が手にふれました。そらから體をさぐると毛皮がのつて居ます。もうこれが順禮に違ひ無いと思つてそつと胸をさぐつたが例の十字架がありません。きつとはづして寢たのだらう。それならば何よりだといきなり魔杖で肩をバツと打つて『羊になれ』と云ひました。と急にムク〳〵と何やら起き上つた樣子なので急いで燈をつけて見ると一匹の羊が寢臺の上に居りました。木樵は大喜びで隣の順禮を次男だと思つて『おい、起きろ。起きろ。順禮は羊になつたぜ』とゆすぶりますと、順禮はびつくりして起き上りました。その顏を見たとたん。木樵はあつと云つて杖を取りおとしました。次男だと思つたのは順禮で、羊にしたのは次男でしたもの。順禮も驚いてあたりを見廻しましたが、隣の寢臺に羊が居るのを見てびつくりしてその家をとび出してしまひました。

がつかりした木樵は暫くじつと考へて居ましたが、やがて『おゝ、誤とは云ひながら二人の息子を獸にしてしまつたのも、今まで大勢の人を獸にした罰だらう。俺は今自分の罪を知つた。もう一生惡い事はしまい。この杖は燒いてしまはう』と眞實後悔してその杖を火の中へ投げ込んしまひました。魔法杖がすつかり灰になると共に、急に彼の羊がブル〳〵と身ぶるひしたと思ふと元の次男になりました。

木樵はあつと驚きました。この時豚小屋の方で『お父さん』と呼ぶ聲がします、行つて見ると豚になつた長男が元の人間にかへつて居ました。木樵の喜びは何んなでしたらう。それと同時に今まで魔杖の爲に獸になつたものは皆人間にかへりました、たゞ岩にされた魔法つかひだけは何時までも岩になつたまゝでした。

木樵親子はそれからは正直な人間になりました とさ。